

修士論文(要旨)

2016年7月

看護学実習が高齢患者にもたらしたもの

指導 芳賀 博 教授

老年学研究科

老年学専攻

214J6903

町田秀子

Master's Thesis (Abstract)  
July 2016

The Impact of Nursing Practices on Elderly Patients

Hideko Machida

214J6903

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hiroshi Haga

## 目次

第1章 緒言	1
1.1 研究の背景	1
1.2 先行研究	1
第2章 研究の目的と意義	2
2.1 研究の目的	2
2.2 研究の意義	2
第3章 研究方法	2
3.1 調査対象者	2
3.2 調査期間	3
3.3 データ収集方法と分析方法	3
3.4 倫理的配慮	3
第4章 結果	
4.1 調査対象者の属性	4
4.2 インタビューデータの分析	4
第5章 考察	6
第6章 本研究の限界と今後の課題	9
第7章 結論	10
謝辞	10
参考文献	

## 第1章 緒言

現在、看護学実習において看護学生が受け持つ入院患者の多くは高齢者である。看護学生は学習の途上にあり、援助技術も十分とは言えない。その学生の受け持ちを引き受ける患者に支えられ、看護学実習は成り立ってきた。学生の受け持ち患者を対象とした先行研究では、半数程度が受け持ちに肯定的（片岡ら、2005）（矢田ら、2002）であり、実習を積極的に受け入れ（高橋、2009）、学生のケアへ感謝（山田、1995）（松浦ら、2012）をしていることなどが明らかになっている。さらに、実習への肯定感の高さと主観的 QOL の関連（飯室、2012）も報告されている。では高齢患者はどのように看護学実習を受け入れ、実習中にどのような経験をして、どのような思いをもっているのでしょうか。その思いを知ることが、看護学実習の受け持ちを引き受けることに伴う高齢患者への不利益を最小限にするだけでなく、意義のある看護学実習についての示唆を得ることにつながる。

## 第2章 研究の目的と意義

高齢入院患者が看護学生の実習をどのように受け入れ、受け止め、高齢患者に何をもたらしたのか、そこには何が影響していたのかを明らかにする。実習受け持ちとなる高齢患者が、実習を通してどのような経験をしているのかを明らかにすることにより、対象となる高齢患者の負担を最小限にし、意義のある看護学実習についての示唆を得ることができる。

## 第3章 研究方法

A病院に入院中で、看護学生の受け持ちを引き受けた認知障害のない65歳以上の高齢者で、研究協力の同意を得られた患者に、インタビューガイドをもとに半構造化面接を行い、Smith, J.A の開発した解釈的現象学的分析（Interpretative Phenomenological Analysis : IPA）を参考にして分析を行った。

本研究調査に当たり、桜美林大学およびA病院の研究倫理審査委員会の承認を得た。

## 第4章 結果

研究参加の承諾が得られたのは回復期リハビリテーション病棟入院中の60歳代後半から70歳代前半の男性1名、女性2名の計3名だった。インタビューデータから、7テーマ、16サブテーマが導き出された。《 》はテーマ、【 】はサブテーマ、「 」は調査対象者の実際の語りのデータを示す。

導き出されたテーマは、《実習受け入れ時の状況》、《実習受け入れ時の患者の意識》、《ケアへの感謝》、《学生への好意的な印象》、《学生の関わりの受け止め》、《学生に対する期待》、《学校・教員の存在を受け止める》だった。

## 第5章 考察

《実習受け入れ時の状況》 受け入れ患者は、入院期間が長く、リハビリテーション中心の治療、身体に残る障害、今後の生活スタイル変更の必要性、学生の実習受け入れ経験を有するなどの特徴を持ち、疾患を自分なりに受け止め、リハビリに取り組んでいった。

《実習受け入れ時の患者の意識》 患者は肯定的に実習を受け入れ、その理由の一つは、病院にお世話になっているという片岡（2005）の報告と同様だった。自分が受けている医療によって回復に向かっている自覚を持っていることが、肯定的な受け入れにつながると考えられる。また、過去の経験から実習に期待をもち、積極的に実習を受け入れていた。

《ケアへの感謝》 学生への感謝は、松浦ら（2012）の報告にあるが、感謝もたらしたのは、不自由な身体を労わるケアと、これからの生活を考えた学生の提案だった。痺れて動かない自分の手を温めてくれたケアは、涙とともに語られた。不自由になった自分の身体と日々向き合っている高齢患者は、温熱刺激による血液循環の促進、筋緊張の軽減による疼痛閾値の上昇・リラクセーション効果など（馮、2013）（末広、2007）とともに、ケアにこめられた労わりの気持ちに感謝していたと考える。また、これから先の生活に向けた、提案にも感謝していた。退院後の生活を共に見据え、それにつながる提案が、感謝の気持ちにつながったと考える。これらは、新山ら（2012）による、脳血管障害をもつ患者に関する研究でも同様に報告されている。

《学生に対する期待》 片岡ら（2005）は、実習受け入れへの否定的意見を持つ理由の一つに、技術への不安をあげている。しかし、今回学生の技術への不安は聞かれず、患者は未熟であることを当たり前と受け止め、熱意や誠意を重視していた。看護学生を支援する対象として見ていた（高橋、2014）という先行研究からも、受け持ち高齢患者は、学生に対して自分が成長の一端を担っていると認識し、学生を見守っていたことがわかる。

今回の受け持ち高齢患者は、実習開始時から看護学生の実習を肯定的に受け止め、実習終了時に『良い看護師になってほしい』という役割期待を強くもったと考える。学生は、患者から自分に向けられた期待を感じることは、看護を学ぶ意欲や、看護師を目指して頑張るという自らの動機付けの強化につながると考える。

今回は、全員が実習に肯定感を持っていたが、学生の関わりの受け止め方はさまざまであった。高齢患者が学生に寄せる好ましい思いや信頼が十分でない場合は、学生の援助技術が患者の身体的な負担のみならず、心理的な苦痛にもつながる可能性もある。教員は、高齢患者が学生の関わりに求めているものに常に耳を傾けて行く必要がある。

## 第6章 本研究の限界と今後の課題

本研究調査は、対象人数が少なかったため、結果に偏りが生じている可能性がある。また、全員が肯定的に看護学生を受け止めていたため、否定的意見が反映されていない可能性がある。今後は否定的受け止めも含めた、複数の患者の調査を行う必要がある。

## 第7章 結論

看護学生の受け持ちとなる高齢患者は、

- 1) 病院にお世話になっているという気持ちや、過去の好意的な印象などによって実習を肯定的に受け入れていた。
- 2) 自分の不自由な身体への配慮を感じる学生からのケアやこれからの生活を考えた提案に感謝の気持ちを抱いていた。
- 3) 高齢患者は、実習を引き受けた学生に対し、立派な看護師になってほしいという役割期待を抱いていた。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省 患者調査 ( <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/> (2016.7.3 アクセス) (2014)
- 2) 安斎由紀子:看護学実習の構成要因に関する研究,看護教育学研究,1(1):5-20(1992)
- 3) 杉森みど里,舟島なをみ,安斎由貴子:看護学実習の授業構造の分析,千葉大学看護学部紀要,14:1-6(1992)
- 4) 木下天翔,八代利香:看護学生が臨床実習で体験する倫理的ジレンマ,日本看護倫理学会誌,8(1):39-47(2008)
- 5) 高野真由美,松本 佳子:老年看護学実習 I で看護学生が認知症高齢者との関わり時に抱いた気持ち,川崎市立看護短期大学紀要,21(1):31-38(2016)
- 6) 細田泰子,山口明子:実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因,日本看護研究学会雑誌,27(2):67-75(2004)
- 7) 中山亜弓,澤田由美:新人臨床実習指導者の精神看護学実習におけるやりがい感,新見公立大学紀要 36:107-111(2015)
- 8) 小川妙子,舟島なをみ:看護学実習における教員の教授活動—学生と患者との相互行為場面における教員行動に焦点を当てて—,千葉看護学会誌,4(1):54-60(1998)
- 9) 月田佳寿美,清水誉子:臨地実習で看護教員が学生に対しておこなうケアリング,福井大学医学部研究雑誌,16(1):21-35(2016)
- 10) 山下暢子,定廣和香子,舟島なをみ:1994年から1998年における看護学実習に関する研究内容の分析—学生を対象とした研究に焦点をあてて—,看護教育学研究,12(1):29-36(2003)
- 11) 古都昌子,小村三千代,岩本郁子他:実習施設と教育施設との連携に向けての具体的方策—看護学部開設3年目に導入した看護学実習連携会議の効果—,札幌市立大学研究論文集,19(1):25-30(2015)
- 12) 山本純子,伊藤朗子,中本明世他:日本語版 ECTB を用いた成人看護学実習の実習指導評価—看護学生と実習指導者、実習指導者の役割による比較から—,千里金蘭大学紀要,11:121-129(2014)
- 13) 杉森みど里:看護教育学.第3版,265-256,医学書院(2000)
- 14) 片岡久美恵,中川史子,木村三津子他:臨地実習で看護学生の受け持ちになることに対する患者の意識,第36回日本看護学会論文集 看護教育:164-166(2005)
- 15) 矢田昭子,上岡澄子:看護学実習における受け持ち患者制による患者負担患についての検討,第33回日本看護学会論文集 看護教育:132-134(2002)
- 16) 高橋あけみ:高齢患者にとって看護実習 p を受け入れたことへの意味づけ,桜美林大学修士論文(2009)
- 17) 山田あゆみ:看護学実習においてケア対象者となる患者の行動に関する研究—学生との相互行為場面に焦点を当てて—,看護教育学研究,4(1):18-37(1995)
- 18) 松浦侑子,岩永喜久子:臨地実習で看護学生を受け入れる患者の思い,第42回日本看護学会論文集 看護管理:549-552(2012)
- 19) 飯室淳子:実習における看護学生の関わりが高齢入院患者の主観的 QOL に及ぼす影響,桜美林大学修士論文(2012)
- 20) 松葉洋一,西村ユミ:現象学的看護研究 理論と分析の実際.第1版,医学書院(2014)
- 21) 松葉洋一:開かれた現象学的研究方法,看護研究,44(1):17-26(2011)
- 22) ベナー・パトリシア:ベナー解釈的現象学 健康と病気における新体制・ケアリング・倫理,第1版,医歯薬出版株式会社(2012)
- 23) 伊賀三屋:解釈的現象学的分析(IPA)の方法論,新潟大学教育学部研究紀要,6(2):169-192(2013)
- 24) 回復期リハビリテーション病棟協会ホームページ:<http://www.rehabili.jp/> (2016.7.2 アクセス)
- 25) 馮晶:手を温めることによるリラクゼーション効果の研究,桜美林大学博士学位論文(2013)
- 26) 末広静子,市村孝雄:温熱刺激のリラクゼーション効果,下関短期大学紀要(25):41-56,(2007)
- 27) 新山真奈美,鈴木圭子:脳血管障害による身体機能障害のある高齢者のラフスタイル再編成の過程,秋田大学保健学専攻紀要,20(2):11-19(2012)
- 28) 高橋幸恵,香春知永:根治困難ながんを抱えた患者の看護学生に受け持たれた体験の意味,日本看護学会論文集 看護教育:153-156(2014)
- 29) 梶原江美,岩本テルヨ他:看護師の対応について手術を経験した変形性股関節症患者が認識するプロセス 西南女学院大学紀要 19 15-25 2015